

人も馬も豚も

(株)サイエンスブリーディング 名越 仁 宣

気持ちのいい小春日のある日、訪れた養豚場には放飼場があった。そこでは、離乳した後の母豚を数日間野外に放飼していた。

どの母豚も暖かな日の光を浴びて実にノビノビとゆったりとしている。4ヶ月弱の間ストールに閉じこめられ、分娩、3週間足らずとはいえ10頭前後の子育てを立派に果たした最高のご褒美なのだろう。

私が豚に携わりはじめた20年前には結構普通に見られた光景だろうが最近では少数派だ。しかし、種豚の放飼場は減ったけど、“子ぶたの家”のような離乳豚舎はここ5年ほどでかなり増えた。建築確認が要らないとか、他の豚群との水平感染がないとかの良い点は多々あるが、日光に当たるといこともひとつだと思う。外に出て寝そべっている子ぶたを見ているとストレスから解放されたような気持ちが私にも伝わってきて、すこしだけ癒される気がする。

日光とストレスの関係でいえば興味深い記述を以前(2004年春)目にした。私の愛読書である競馬週刊誌の“ギャロップ”だ。その誌面で3週にわたって、岡田繁幸、吉田輝哉、吉田克己などのホースマンが対談していた。この3人は競馬ファンなら誰でも知っている偉大なブリーダーである。とくに私は密かに岡田繁幸を尊敬している。

そこで岡田氏が話しているのだが『太陽光線を当てると馬がボケちゃうからやっちゃいけないんですけど、太陽光線を遮断するのはレースの3週間でもOKだと思います。「太陽光線にあたるとストレスが抜けちゃって走る闘争心がなくなるからだめ」という人もいるけど、20日間あれば闘争心は戻りますよ。』また剥離骨折などケガをした馬に対しては『太陽光線を当てることによって、植物も動物も元気が出て、自然治癒力が高まる。さらに放牧による自然運動をして運動量を上げて健康体に戻して自然治癒力を高めないといけない。』と力説している。

豚も放牧されると気持ちいいんだろうな、と思うが、今の豚価において放牧養豚が経営的に成り立つと思えないし、また、できる環境や場所も限られるので現実的ではないが。しかし、病気になった子豚などは、日光に当ててのんびりとさせてやれば相当数助かるかもなど、草原で寝そべり思いっきりリラックスしながら考えていた。

傍らでおにぎりをパクついている息子が私にささやいた。“野原で遊び回る”ような子供になって欲しいと願い“遊野”と名付けたひとり息子である。『父ちゃん、早く帰ってプレステやろうぜ。』と。なかなか思い通りにはいかないものです。